

審査員特別賞

本当に必要なもの

國學院大學久我山中学校 3年

半田 理彩子

ある日、1つの記事が目にとまりました。

「その途上国支援、本当に必要ですか？」

気になって読んでみると、それは想像していたものとははるかに違う内容でした。

向田麻衣さんという方がいます。この方は15歳の時に聞いた講演で衝撃を受け、17歳にして発展途上国支援のためネパールへ渡った社会起業家です。何かネパールの手助けがしたいと思い、日本を出発したものの、いざ着いてみるとネパール人は幸せそうに暮らしていて、どうしたら手助け出来るか分からず悩んだそうです。また、日本人なら靴を履くのが当たり前なので、靴を履かずに砂利道で遊んでいる子どもなどを見ると、

「かわいそうだな。」

とってしまうのが普通です。しかし、ネパール人は生まれた時から靴を履かないのが当たり前なので、特に苦になることなどなく、日本人との価値観の違いに戸惑うこともあったそうです。そんな、貧困ながらも幸せそうに暮らすネパール人に自分が出来ることは何だろうか。向田さんは、NGOの支援を受けている人にインタビューして回りました。そこでは、次々に意外な答えが返ってきたのです。何と、多くの女性が、

「お化粧がしたい。」

と答えました。向田さんが持っている使いかけの口紅やチークをどうしても欲しいとお願いしてきます。そこで、向田さんは日本に帰国し、化粧品を持って再びネパールへ行き、ワークショップを始めました。すると、ネパールの女性は皆心から笑顔になることが出来たのだそうです。

私は、この向田さんの体験を知って、発展途上国を支援するということに対するイメージが大きく変わりました。今までは、支援というと、生活に欠かせない物資を送ったり、金銭面の援助をしたりするだけというイメージがありました。しかし、本当の支援とは、発展途上国の人の心を少しでも豊かにすることなのだと思います。もし自分が貧しい国に生まれていたら、お金と、生活必需品さえあれば幸せな訳ではないでしょう。心から楽しい、うれしいと感じられた時、初めて人は幸せと思えるのではないのでしょうか。

さらに、ここで、発展途上国の方を支援する方法として、1つの提案があります。それは、歌を教えることです。なぜ歌なのか、理由は2つあります。1つ目は、ものがなくても楽しめるからです。ものを寄付することは大切です。しかし、ものは、古くなったり、なくなったりしていつか使えなくなってしまいます。しかし、歌なら、どれだけ歌ってもなくなりません。2つ目は、私たちがいなくても出来るということです。普段日本で暮らす私たちは、場合によっては他国に長期間滞在出来ないかもしれませんが、よって、現地の人だけで楽しめるものがよいのではないか

と考えました。いつか私も現地に行って、発展途上国にいる人の心を支援したいです。